
純黒

じじじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純黒

【Nコード】

N4125Q

【作者名】

じじじ

【あらすじ】

じゅんぐろ。新手の美人局みたいな。

彼女は高校の同級生だ。

彼女と言っても明確に付き合っているわけではないのだが。

将来的にそうなればいいなと思っている相手だ。

それがなんと。

今日はアパートで一人暮らししているオレに料理を振る舞ってくれるらしい。

——なるほど、脈アリだな。

オレは彼女の見えないところで小さくガッツポーズを決めた。さりげなくアツピールしていたがついに通ったのか。これまで長かった。よくやったものだ。

オレに賛美の言葉をかけつつ、今現在、台所に向かっている彼女の背中を見る。

部屋は1Kだ。ボロアパートだからそんなものだ。だから二人の距離は2・3メートル程で、普段彼女に接するよりもずっと近く感じる。

彼女の包丁がまな板を打つ一定のリズムが心地いい。何を切っているのかは背に遮られて見えないが、かなり手際がいい。これなら期待できそうだ。素晴らしい。

オレはきつと幸せものなのだろう。

——そう思い込んだのが一時間前だ。

彼女が料理用ミトンをはめて持ってきた小鍋の中からは、良い香りが漂っている。彼女が作ったという事実を差し引いても、食欲を湧き起こらせるものだ。胃がウォーミングアップを始めて痛いほどだ。

ここまでは素晴らしい。

ただ。

ただ、色が黒い。

つまり、鍋の中の物体があらゆる波長の光を吸収して反射していない。

そのものずばり、純黒というべきものだった。

鍋の半分ほどがペースト状の黒色に侵食されているのだった。

「……あの」

部屋が明るいのには鍋の中が闇——その状況に、躊躇いが言葉として出た。

だが、

「お待たせしました」

彼女の笑顔は揺ぎ無い。その視線が、オレの頭に痛く突き刺さる。さっきの胃痛が悪化している。これは身体が無意識に発する危険^{エマージ}信号^{エンシ}というものではないのか。匂いはすごくいい。けれどそれだけでは誤魔化されない本能が警報を発しているのか。

「あの」

「ちよっと失敗しちゃった」

こちらからしてみれば成功品を知らないので失敗がわからないのだが、その失敗は見た目についてだけであることを切に願った。さらに追加で祈った。

——今からこれを食するのか、オレは。

思わず倒置法が出てしまう。

……とりあえず、鍋の中身に突き刺さったおたまに手を伸ばせばいいのか？

逡巡していると、彼女がこちらに手の平を差し出してきた。オレの手とは比べ物にならないほど小さな手だ。色が白くて、手触りが

さらさらとしていそう。鍋の中身よりそちらの方が食べたいくらいだ。

などと現実逃避せず、その手の上をよく見てみる。
そこには白の錠剤が2錠転がっていた。

「胃薬です」

いいフォローだ。けれど裏を返せば、作り手の彼女にしてみてもこの鍋の中身には食用に難ありということがわかっていているということだ。見た目は最悪だけど美味しい——などというオレの一片の希望は、彼女の手によって金鎚で叩き砕かれてしまった。

さて、次に彼女が取り出したるは、少し濁った水のようなものが入っているペットボトル500ml。

「これは経口補水塩です」

脱水症状に良く効く飲料だ。風邪や下痢の時に重宝する。

この瞬間、彼女は良く出来た子であることが、オレには理解できた。用意周到である。彼女の振りまく優しさを受けては誰もが皆イチコロになってしまいうだろう。ところでイチコロは「一口でコロしてやるぜ！」の略だったか。そうじゃなかった気がするんだが、今はわからない。そうなのか、そうではないのか。それはオレの味覚のみぞ知る。

そして、ついにとも言うべきか。彼女は小さなスプーンに鍋の中の黒をすくい、こちらに突き出した。

瞬間、オレの全身の毛穴から汗が噴き出した。

緊張の一瞬が訪れようとしているのだ。オレは悟る。

そしてそれは、彼女の可愛らしさの前に絶対不可避なのだ。

「どうぞお召し上がり下さい」

「……食べるのこれオレ？」
「食べないんですか？」

彼女は上目遣いでこちらを見た。光の反射のせい、少し瞳が潤んで見えた。

その様子を見て心が痛んだ。苦しいくらいに締め付けられたような気分になった。

「私は、これを食べてもらうためにここに来たんです。でなければ男一人暮らしの部屋に一人で来るわけがないでしょう」

「まあ、そう言われるとそうかもしれない。でも——」
「でも、じゃありません」

彼女の顔は耳まで真っ赤だった。

その吐息は熱っぽく、男の性を煽った。

熱い視線が、彼女の懇願の先にいるのが自分であることが不思議に感じられた。

固唾を呑む。咽喉が鳴る。

彼女との距離が近い。そのことに妙な気恥ずかしさを感じる。目を合わせることに苦痛にさえ感じる。

けれど彼女がこちらから目を離さず訴えるようにじっと見つめているものだから、オレも目を逸らすことが出来ない。

「あんまり……女の子に恥をかかせないで下さい」

そのとき。

……ああ、と思う。

そうか、と考える。

彼女は覚悟が出来ていた。こうなることを覚悟していた。最初からそのつもりだったのだ。

恥の姿を、オレになら見せてもいいと信用してくれたのだ。

ならばオレもそれに応えなければなるまい。それに、据え膳食わぬは何とやらだ。

だからオレは、意を決して口を開いた。

□

「やだ、ピクピクしてる……。こんな見るの初めて……」

□

無駄に色っぽい展開に騙されオレだが、彼女の迅速な対応によってどうにか一命を取り留めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4125q/>

純黒

2011年1月28日14時46分発行